

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙I 3章18～23節>

①私たちは意識しないで自分の知恵に騙されることがある？！

「だれも自分を欺いてはなりません」(18)。ここでは、「私はアポロにつく、私はパウロに」と、自分が下した判断に固執することが考えられています。それで争いが生まれ、仲直りできないのです(3:4, 1:10-13)。この根底にある一番の問題は、「**自分はこの世で知恵のある者だと考えている**」(18)ことだ、とパウロは言います。面白い指摘だと思います。「私たちは、自分の知恵に騙(だま)されて、自分の下した判断が正しいと固執することがあり得る」、そんなことを考えさせられるからです。では、パウロはなぜこんな発想をしたのでしょうか？

②知恵が悪賢くなり、議論が空しく終わる原因はどこに？

自分の知恵だけで生きていると思っているなら、こんな発想は湧きませんし、もし湧いたら不安の中に突き落とされます。パウロは神様を思う中で自分の知恵について考えているのです！「**この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです**」(19)。人間の知恵が悪賢くなり(19)、人間の知恵だけでなされる議論が空しく終わることも多い(20)。この問題の原因をはっきり捉えることができるのは、神様を前にして自分の知恵や判断を考える時なのです！

③神様の私たちへの愛を知ったら、自分を誇る必要はなくなる！

「だれも誇ってはなりません」(21)とありますが、「人間を(誇るな)」とある点が重要です。「誇る者は主を誇れ」(1:31)です。つまり、私たちは神様のものであり、キリストのものであると同時に、私たちは神様からキリストをいただいたのですから、すべては私たちのものでもあるのです！(ローマ8:32) ここを読んで、ルターの『キリスト者の自由』の冒頭の言葉を思い出しました。

「キリスト者とは何であるか、またキリストが彼のために確保して与えて下さった自由とは何であるか。これについてはパウロも多く書いているが、根本から分かるように、私は次の二つの原則をあげてみたい。第一、キリスト者は全ての者の上に立つ自由な主人であって、誰にも従属していない。第二、キリスト者は全ての者に奉仕する僕であって、誰にも従属している。」

この神様を誇り、この神様に従って生きられる恵みに感謝です！